

所属変更

氏名

所属機関



藻類学会 64 年目 清末忠人会員が科博に海藻標本を寄贈

元鳥取県立博物館学芸員で現鳥取県博物館協会理事の清末忠人氏（85 歳）が、長年にわたり収集されてきた海藻標本コレクション約 1000 点（押し葉標本）を国立科学博物館に寄贈した。

清末氏は、鳥取大学学芸部生物学教室卒業の翌年、昭和 28 年 4 月に、指導教官であった生駒義博先生の薦めで、創設もない日本藻類学会（昭和 27 年 10 月設立）に入会された。以来 64 年間にわたり学会費を休むことなく納め続けている。

このたびの標本寄贈は、ご子息の清末幸久氏（鳥取県立博物館学芸員）が、平成 26 年 2 月に当館の藻類標本室を視察されたことがきっかけとなっている。筆者が藻類標本のデータベース管理について実演する際、試しに採集者を「清末」で検索してみたところ、驚いたことにパソコンの画面には昭和 40 年代に採集された 30 件の鳥取県産海藻標本のデータが並んだ。問抜けにも「あれ？以前科博に来られたことがありましたか？」と訊ねた筆者に、幸久氏は「それ、親父です」とお答えになったのである。およそ 40 年前（寄贈日不明）に忠人氏から寄贈された標本であった。現在も鳥取自然保護の会や鳥取生物友の会の会長として、忠人氏が海藻採集を続けられていると聞き、筆者が標本の寄贈をお願いした次第である。去る 10 月 3 日、標本寄贈の打合せを兼ねて両氏がつくばへ来られ、標本と 40 年ぶりに再会された（写真）。

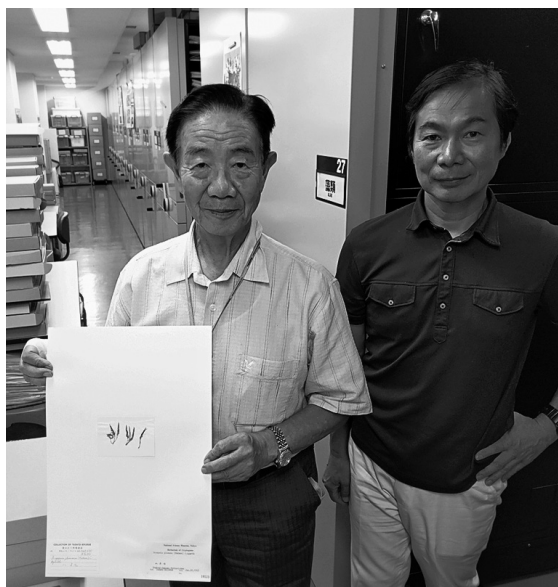


図 昭和 40 年にご自身が採集されたハネモの標本を手にする清末忠人氏（左）と幸久氏（国立科学博物館）。

忠人氏からは生駒義博のエピソードなど、海藻学史を勉強中の筆者にとって興味深い話を聴かせていただいたが、なによりも吃驚したのは押し葉標本のことである。海藻の押し葉をつくる者同志でしばしば話題になるのは「誰が段ボール板を使い始めたか？」という謎で、私もシダ標本で古くから使われていたことまでは調べていたものの、誰が海藻に持ち込んだのかをつきとめることができなかった。忠人氏によれば、鳥取大学でシダの研究を始めたところ、東京教育大学理学部の伊藤洋教授の研究室に内地留学したところ、伊藤教授がシダの押し葉作製で吸水紙と波形のトタン板の他にすでに段ボール板も使っていた。それはトタンの波板に圧力が加わったときにシダが波形に歪まないようするための工夫であったという。ある日それを見て「波板がなくても乾燥できましたよ」と進言したのが忠人氏であった。さて当時、同大学の臨海実習は下田の実験所に助手として勤務していた千原光雄氏（本年 8 月 17 日に逝去）が担当されていた。実習の応援に参加した忠人氏がシダの方法を薦めて、海藻の押し葉をつくってみたところこちらにも実にうまくいったので、その後海藻でも段ボール板が使われるようになったものらしい。（北山）